トピックス

日記の宛先は？

Kate Summerscale, *Mrs Robinson's Disgrace: The Private Diary of a Victorian Lady* (New York: Bloomsbury, 2012)

渡辺　美樹

今回トピックスで取り上げるのは、ノンフィクション『ロビンソン夫人の不名誉：ヴィクトリア朝レイディの私的な日記』(2012) である。その作者ケイト・サマースケイル (1965~) は、スタンフォード大学でジャーナリズムの修士号を獲得し、インディペンデント社に就職し、物書きとしての第一歩を踏み出した。

その後、デイリー・テレグラフで死亡記事欄を担当していた時期に、1920 年代に男装の麗人（レズビアン）として一世を風靡したジョー・カーステアズ (1900~1993) の死を知った彼女は、この女性の人生を処女作『ネヴァーランドの女王』(1997) にまとめ、サマセット・モーム賞を受賞する。

2002 年（推定）には、男子出産に伴い新聞社を退職し、作家として一本立ちすることにする。そうして書かれた二作目『最初の刑事：ウィッチャー警部とロード・ヒル・ハウス殺人事件』(2008) は、1860 年にカントリーハウスで起きた幼児殺害事件を扱ったノンフィクションで、サミュエル・ジョンソン賞を受賞している。

この二作目では、当時の人々の注目を集めながら現在では忘れ去られた人々――例えば後に犯人だと告白するが裁判では無罪となったコンスタンス・ケントや英国で誕生した最初の刑事の一人ウィッチャー警部など――の姿をその当時の記録から浮かび上がらせ、事件を再現してみせた。彼女は、現実の犯罪が作家にインスピレーションを与え、推理小説という新しいジャンルを生み出すきっかけとなったと主張している。

第三作目が、ここで取り上げる『ロビンソン夫人の不名誉：ヴィクトリ

ア朝レイディの私的な日記』である。今回は離婚法の変わり目に立ち会った女性イザベラ・ロビンソン (1813~1887) を取り上げ、離婚裁判の焦点となった彼女の日記の抜粋を中心にその生涯を読み解いている。ただし作者は、オリジナルの日記も裁判のために作られたそのコピーも現存しないと注釈している。その当時妻の持ち物は夫に所有権があったので、夫が彼女の日記を処分してしまったようだ。

イザベラの夫ヘンリーは、法律の要求に従って姦通罪適用のための証人を二人法廷に立たせたが、二人とも証人の資格に欠けていた。妻の有罪を立証するものは夫が法廷に提出した彼女の日記だけとなってしまう。ところが、その日記には他の男性とのキスや抱擁についての記述はあっても、性的交渉があったという明確な記述はない。この日記の解釈を巡って法廷は揺れるのである。

結局、性的欲望を示す記述が散見されるこの日記は、妻が「子宮の病気」が原因で性的な妄想を抱くようになったという証拠にはなったが、姦婦であるという証拠にはならなかった。かくして夫の要求は斥けられ、1858 年の裁判では離婚は成立しなかった。つまり日記が夫側の敗訴の一因となったのである。

姦夫として告発された医師エドワード・レインは、骨相学者のジョージ・クーム (1788~1858) 宛の手紙の中で、イザベラが日記の中で想像上の読者に呼びかけていることに不快を覚え、この点からだけでも日記を狂気の代物と断ずることができると述べている。告白という真実の記録というよりも、文学的な虚構としてこの日記が執筆されたことに被告側の活路があったのだ。とはいえ、当時は文学的虚構としての日記の価値は認められていなかった。この虚構性によって認められたのは、記述内容が単なる作者の妄想に過ぎないということのみである。

1850 年にイザベラの頭蓋骨を検査したクームは、彼女について、性欲が強く、認められたいという欲求も強い一方、社会的・宗教的道徳心には欠ける女性であると判定している。そのクームの助言に従って、彼女が色情的妄想狂の汚名に甘んじることにしたのは、自分を文筆家として評価してくれたもう一人の被告エドワード・レインを守るためだった。しかも狂気の符号を帯びることは、離婚不成立の要因となるため、夫への恨みを晴

らす手段ともなったのである。

イザベラは日記を誰に宛てて書いたのか不明であるが、ノンフィクション作品として考えた時、その当時の離婚裁判がわかる興味深い作品となっている。